

『逍遙遺稿』札記

——鶴鳴いて月の都を思ふかな 子規と逍遙——

一

明治二十八年四月、子規正岡常規は折からの日清戦争に、その健康を案じた周囲の反対を押し切って、新聞「日本」の記者として従軍したが、五月十七日、帰国途上の船中にて咯血、神戸病院に担ぎこまれた。一時は重態に陥ったものの危機を脱し、二ヶ月後には須磨の保養院へ移り、やがて八月下旬、故郷の伊予松山に帰ってしばらく静養につとめることとなった。体力が回復するにつれ、じっとしておれない質の子規は、四月から当地の愛媛県尋常中学校に英語教師として赴任していた漱石夏目金之助の下宿愚陀仏庵の二階にころがりこんだまま、漱石を巻きこんで松風会の連中と俳句作りに熱を上げていた。その子規のもとへ、十月七日付で東京の不破信一郎から封書が届く。不破は、伊予宇和島の人。子規や漱石とは文科大学の同窓で、史学科の卒業である。子規らとはあまり交際は無かったようだが、同じ文科のこと、当然面識はなくてはならない。

二 宮 俊 博

不破の手紙は、昨年の冬明治二十七年十一月十六日、急性肺炎に罹って長逝した漢学科の卒業生中野重太郎に関するものであった。不破とは同郷で逍遙と号したこの青年は、当時研究科に進み支那文学史を起草せんとしており、かねてより文科大学の支那語の外国人講師張滋昉を始め一部の大学関係者の間でその漢文の才が注目されていたが、筐底には『悲鳴餘響』『芸窓餘感』などと題した漢詩稿や七十首余りの和歌、更には『慈淚餘滴』^(注1)という小説の草稿その他が蔵されていた。不破は宮本正貫・小柳司氣太・米津仲次郎や佐々木信綱ら生前、重太郎と親しかった人々と語らって、なんとかその遺稿を世に出してやりたいと、この春先から周旋奔走していたのである。

子規宛の手紙の中で、不破は、「学校生徒及同郷者」三百余名の賛成者を得てその「出版費の義捐を乞」い、遺稿集を刊行する段取りであることを説明し、既に序文や逍遙の漢詩文が第一回目の校正にかかっている旨報告した上で、次のように書いている。^(注2)

而して逸事、弔詞、追悼文ハ本月十五六日頃迄に之ヲ集め其時

別ニ印刷シテ卷尾に附し度存候處御承知之通り交際も餘り博からざる方之人に有之候へば右弔詞、追悼文等餘り集まり不申體裁上遺憾に堪へず存候に付き甚だ差掛り申上げ恐縮之至に候へども何卒ナニカ玉稿御認め被下右十五六日迄ニ小生宛御送付被成下間敷くや 若し御忙敷御座候は、發句唯一句ニても宜敷何卒是非御願申上度奉存候

次に右出版費之内へ御義捐是ハ二十日頃迄ニ小生宛御送付被下度奉願候 御同學たりし夏目君松本、米山、尾田君等皆一統ニ壹圓宛相願候間此義御參考迄に申上候 尤も御思召次第御送り被下度候

右早く御願ニ申上筈之處手少ニて彼是遲延仕り恐縮之至奉存候何卒宜敷御願申上候

平素は寡黙で、かつて高等中学二年の時には級友たちから the Silent といふ「尊称」を奉られたこともあった逍遙が「交際も餘り博からざる方」であるため、追悼文や弔詞の集まり具合が捗しくないのを案じて、不破が子規に寄稿を依頼したのだった。ちなみに、ここに名の挙っている夏目金之助・松本文三郎・米山保三郎・尾田信直らは子規も含め、『逍遙遺稿』刊行に際して揃って金一円を醸出している（『逍遙遺稿』に附された別紙の「發起人賛成者及出版義捐金」一覧表による）。但し、「貴君にも發起人之内へ御加入なりて御名前拜借致候」と不破から言われた子規は、先の一覧表ではそうなっていない。固辞したのであろうか。

二

さて、「發句一句にてもよろしく」と懇願され、更に追伸でも「猶

玉稿之義至急申出重々恐入候へども何卒枉げて御投寄被下度萬々奉希候」と繰り返し要望された子規であったが、不破の懸念や心配を払拭するような熱のこもった追悼文を書き上げ、更に俳句四句をこれに添えて東京の不破信一郎のもとに寄せた。これは、子規が十月十九日帰京の途に就く以前に松山で書かれたものであろう。そして漱石も同じく松山に在って、

百年目にも参らうず程蓮の飯^(注1)

の一句を詠み、今は亡き中野逍遙を供養した。『逍遙遺稿』巻末の雑録の部に載せられた子規の「逍遙遺稿の後に題す」という追悼文は次の如くである。

志士は志士を求め英雄は英雄を求め多情多恨の人は多情多恨の人を求む 逍遙子は多情多恨の人なり 多情多恨の人を求めて終に得る能はず 乃ち多情多恨の詩を作りて以て自ら慰む 天覆地載の間盡く其詩料たらざるは無し 紅花碧月以て多情を托す可し 暖煙冷雨以て多恨を寄す可し 而して花月の多情は終に逍遙子の多情に及ばず 煙雨の多恨は終に逍遙子の多恨に若かざるなり 是に於てか逍遙子は白雲紫蓋去つて彼の帝郷に遊び以て多情多恨の人を九天九地の外に求めんとす 爾來青鳥音を傳へず 仙跡杳として知るべからず 同窓の士同郷の人相議して其遺稿を刻し以て後世に傳へんとす 若し夫れ多情多恨逍遙子の如き者あらば徒に此書を読んで万斛の涕淚を灑ぎ盡す莫れと爾か云ふ

春風や天上の人我を招く

いたづらに牡丹の花の崩れけり

鶴鳴いて月の都を思ふかな

世の中を恨みつくして土の霜

ここで子規は、中野逍遙を「多情多恨の人」だと規定し、同聲相應じ同氣相求むるが如くに、自らと琴瑟相和すべき多情多恨の人をこの世に求めんとしたが終に得ることかなわず、惆悵たる思いの丈を詩に綴って己が幽憤を慰め、遂には意中の人を遠く九天九地の外にまで捜し求めんとして帝郷(天帝の住む仙界)に翔び去ってしまつたという。「多情多恨」とは、物事に対して感受性豊かで感傷に富むというのが本来の意味であるけれども、子規が「多情多恨の人」と言つたこの場合にはもう少し限定されて、恋い慕う相手に溢れんばかりの熱情を灑ぎ、その一方で傷つきやすく繊細で顫えがちな心を内に秘めた者という意味が込められているのであろう。

かかる子規の追悼文は、不破信一郎からの強い要請に応じる形で書かれたものであったが、その実、子規は明治二十七年十一月十六日逍遙が急逝した恐らくはその直後に、「中野逍遙を悼む」と題して、

夙がいやとは餘り無分別^(注6)

という一句を詠んでいた。^(注7)木枯らし吹き荒ぶ季節、それを厭うあまり、じつと耐えて春を待つこともせず、忽焉とこの世を去つた君は、余程分別というものを持たぬ堪え性のない男だと、子規は言う。そのいかにも腹立たしく呆れ果てたという半ばなじるような口吻の裏に、何故かくもあえなく死んでしまつたのかと質したくなるような無念の思いが色濃く滲み出ている。

このような句を詠み、「逍遙遺稿の後に題す」という一文を認めた時、子規の脳裏にはかつて下谷上根岸の寓居を二三度訪ねて来、日頃の寡黙ぶりもどこへやら、胸中の鬱懷を息急切切たように慇懃

た中野重太郎の沈痛な面差が髣髴として思い浮んだに相違ない。

三

そもそも、正岡子規と中野逍遙とは、ともに慶応三年の生まれであつた。子規が伊予松山藩十五万石の下級藩士の子であるのに対し、逍遙は同じ伊予でも南陬の宇和島伊達十萬石の方で、幕末維新に際して明暗を分けた旧藩の命運——松山の久松(松平)家は親藩として幕府に恭順であつたため維新後一時的にしろ土州兵の進駐を招いたが、宇和島は当時四賢侯の一人に数えられた伊達宗城の存在が大きく、小藩ながらある程度維新に参画し得たという意識が士族の間にあつた——は、彼らの心性のありようにも当然ながらその奥深いところで微妙な影を落としていようけれども、それぞれ幼少期より朱子学や漢詩文の素養を身につけた彼らは、明治とともに歩む新世代の一員として、やがて明治十六年、十七歳の時におのおの東上の夢を果たし、十七年九月に東京大学予備門(十九年四月に第一高等中学校と改称)、二十三年九月には帝国大学文科大学に入学した。

その後、子規は当初の哲学科から国文科に転じたが、まもなく途中で学業を廃し、二十五年十二月から陸羯南の主宰する「日本」に出社するようになった。逍遙の方は漢学科に入り、重野安釋・島田重禮の指導を受け二十七年七月に卒業(漢学科第一回卒業生という)、ついで九月引き続き研究科に進んだが、その歳の十一月病に斃れた。時に二十八歳であつた。

子規と逍遙の二人——高等中学二年の時には同じ組でもあつた——が互いに親しく言葉を交わし往き来するようになったのは、具体的にいづごろからかは今のところ不明だが、ある程度その交友が

密になったのは、どうやら明治二十六年になってからのことではないかと思われる。現在見ることで追遙の子規宛書簡のうち最も早いのは明治二十六年五月八日付で、それには、

昨日ハ意外之長座仕り誠ニ失禮御ゆるし下され度候
何分人生の感慨やみ難く□□此事に御坐候 しかし感情的の人間か感情を離るれば猶更苦しかるべしと存し自ら此苦に甘すへき心得に候 人ハ狂とも痴とも評すへけれど我ハ斷然感情の塊となりて此世を過すべく候 何分多才の御身折角文壇に御盡力ねかはしき事に御坐候

舉首濁世不勝栖 只有美人情於玉
與君相老何邊好 楊柳春風賣酒家

わが學文と名譽と知識と生命とを抛てわかおもふ人にあたへ百年の後餘力あらはこれを支那文學の光に發する時あるべしと信じ居候 この心あはれとおほし下さるべく候

云々と述べられ、同年十二月二日付の手紙には、

昨日ハ參堂不圖長座いたし失禮御ゆるし下され度候
御かげにて日頃の鬱を散じ申候 大悟徹底の御境界いつもながら御うらやましく存じ上候 不平、銷魂、此等の分子ハ滲て骨髓に沁して煩惱界に多事なる此身破裂性の感情に訴へて極端の死に終らんか 抑も一世を嘲弄して臭蛆の戯を局外に觀んか 駿邪驥邪 十年の束縛に己れも驚骨と化し去りぬ 文學も哲學も我に於て何かあらん 厭世も樂天も目下の論かは、五里霧中迷ひ來れば茫々無限、三千世界何處に行てか恨なからん

吐血杜鵑啼殘中天半夜恨
磨蹄驪駒蹴盡浮世千秋塵

云々と書かれている。

これらの書簡をみると、追遙は子規のもとを訪ねた際、胸中に積る思いを子規に向つて掻きくどいていたようだ。彼が子規に洩らした「人生の感慨」とは、大局的に見れば、つとに服部嘉香氏が指摘しておられるように、日清戦争前後の「多く感情に活きてゐた當時の青年」の一人として、「空想的に理想を拵へて其れを實現し得ざる悲哀を自識」し、「理想と現實との甚しい距離を知つた絶望・苦悶」が「厭世思想を抱かしめ」たことに起因するのであらう。そしてそれは多分に「センチメンタリズムの赤い色彩」にいろどられたものであり、背後に「戀愛の問題」が伴っていたのである。

中野追遙に即して具体的に言えば、子規宛にかかる手紙を書いた當時、彼は上州館林出身の実業家南条新九郎の長女、サダ（貞子）に狂おしいまでのひたむきな思慕の情を寄せていた。佐々木信綱のもとで和歌を学び、琴をつまびいたこの四歳年下の彼女、「其の性や水よりも純にして、徳は花の美なるが若し。竹柏の流を汲み、歌詞霞飛し、設樂の園に遊び、琴手雲靡す。生まれて右族に出でて、風塵に染まず、賢門に入らんことを志して、粉膩を做はず」（「追遙遺稿」内編「摧琴賦」）におりし人を理想の女性だと思ひ定めたが、（わが思ふ人）には通ぜず、憂懊煩悶のあまり、時に深い怨嗟の呻きをあげていた。「我が百年の命を擲つて君が一片の情に換へん」（同上、外編「道情」七首其二）と願ひ、彼の人の心を得られなければ、これまでの学問もすべてかゝりなく将来文学者として世に立つこともできぬとばかり、自らの全存在意義を恋の成就に賭していたのだ。そうした苦しい胸の内を、相手の素姓や名前まで明かしたかはともかく、根岸の子規を訪ねたおりに懇えていたのであらう。

このような追遙に対して子規が何と言葉をかけたかは、想像に任せるより他ないが、十二月の手紙の中で子規について追遙が「大悟

徹底の御境界」と言っているのは注目されよう。実は、これより三年前の、明治二十三年に夏目金之助が八月九日付の手紙の中で、「此頃は何となく浮世がいやになり」云々と厭世的言辭を吐き、「心といふ正體の知れぬ奴」に悩まされている旨を、子規に洩らしたことがある。その時、子規は十五日付の返書で、

最少し大きな考へをして天下不大瓢不細といふ量見にならではかなはぬこと也 けし粒程の世界に邪魔がられ、うぢ虫めいた人間に追放せらるゝとは、とても扱も情なきことならずや

と激励したが、生来陰ることのない向光性の精神とでもいうべきものを持ちそれが活発地に動いて已まない子規は、自身の健康のことと与つてであろう、「かくまで悟りこみたる我に一寸の光陰をかさぬ天道様こそうらしめしけれ」と、人生への懷疑のなかにへたりこみ厭世的気分の中にたゆたっている余裕は無いと言わんばかりの反応をみせたのであった。それ故、当時漱石の厭世気分が何に由来しその内実是如何といった方向へは、ほとんど興味を示していない。その子規に、漱石は「悟道徹底の貴君が東方朔の嚙語に等しき狂人の大言を眞面目に攻撃してはいけない」と半ば閉口半ば苦笑の体で、それ以上己れが内面に抱え込んだ問題については口にせず終っている。逍遙が子規にみた（大悟徹底の御境界）も、三年前に子規が漱石に示した態度とさほど径庭がなかったとすれば、逍遙は子規と話すなかでその明快な口調に「日頃の鬱」は散じたかも知れぬが、あくまで一時的に過ぎず、彼自身の「煩惱」は果てることになかったであろう。もつとも、深刻な恋の悩みや苦しみは、それを他人に打ち明けたところでどうなるというものでもないが、心中もだし難く誰かに語らずにはおられない厄介な面がある。ただ、何と答えたかは別としても、子規には日頃無口で何を考えているのかよ

くわからぬようなこの男が、実りそうもない恋に身を焦しあられもなく苦悶している姿だけは、克明に印象づけられたに違いない。

その後、中野逍遙は子規のもとへ、十月三日付で「和青厓子白雲峰之詩併供子規雅兄達覽」として端書に漢詩一首を寄せ、更に翌二十七年四月と九月（？）とにそれぞれ封書を送っている。四月のそれは、九日付で、「大都の煩塵に堪へかねてしばし上州旅行の途にのぼり申候」と記し、漢詩二首（後に『逍遙遺稿』外編に「上州羈旅、感傷十律」其七・八として収録）を添えている。この上州への旅は、「上州羈旅、感傷十律」其一に「歳の甲午春三月、吾佳人を憶うて上州に入る」とあるように、その歳の三月に結婚した南条貞子の面影忘れ難く、その生まれ故郷である群馬の地を訪うたものであった。九月（？）のそれは、八月初旬帰省中に別府に渡り、中津―耶馬溪―柳川―熊本―三角―長崎―佐賀―太宰府―博多―下関とめぐって再び別府から宇和島に帰った九州旅行に際して詠んだ「九州漫游感慨十二律」を寄せたもので、文科大学講師張滋昉の批点と評語が加えられている（『逍遙遺稿』では「九州感慨十二律」と改題し、批点等は削除されている）。このように中野逍遙がその詩稿を子規に見せているのは、明治二十五年八月「日本」に「岐蘇雜詩三十首」節録十五を載せたこともある子規の漢詩人としての力量を高く評価した上でのことであつたのは言うまでもない。ただ、もはや以前のよう子規に向つて胸中をくどくどと訴えることはしなかった。

四

既に述べたように、正岡子規は中野逍遙歿後一周忌に不破信一郎らの奔走尽力によって刊行された『逍遙遺稿』に「逍遙遺稿の後に

題す」という一文を寄せ、俳句四句を添えた。今一度、その句を掲げると、

春風や天上の人我を招く

いたづらに牡丹の花の崩れけり

鶴鳴いて月の都を思ふかな

世の中を恨みつくして土の霜

という四句である。

このうちの第四句は、中野逍遙の愛好した李賀、字は長吉——二十七歳で夭逝したこの唐代の詩人は、後世鬼才と称せられた。凄冷詭怪と評される作品を残したためである。ちなみに詩人や文人の死を白玉楼中の人となるというのは、李長吉の臨終の際のエピソードに基づく——が、「秋来」と題する詩に、

桐風心驚壯士苦 桐風 心を驚かし 壮士苦しむ

衰燈絡緯啼寒素 衰燈 絡緯 寒素に啼く

誰看青簡一編書 誰か青簡一編の書を見て

不遣花蟲粉空蠹 花虫をして粉として空しく蠹ましめざる

思牽今夜腸應直 思ひ牽かれて今夜 腸 応に直なるべし

雨冷香魂弔書客 雨冷やかにして香魂 書客を弔ふ

秋墳鬼唱鮑家詩 秋墳 鬼は唱ふ 鮑家の詩

恨血千年土中碧 恨血 千年 土中に碧ならん

と詠じた、その結句を想起させる。李賀の幻視した「恨みの血潮は消えることなく千年の時を経て、碧玉と化して残るだろう」というイメージは凄絶であると同時に甘美な趣きすら感じさせなくはないが、《土の霜》ではいかにも寂寥として即物的だ。己が心血を濺いで書き上げた詩稿を碌に読んでくれる者がいないという李賀の絶望の嗟まがかかる幻想を喚び起したといえようが、子規が《世の中

を恨みつくして土の霜」と詠じたその時、果して中野逍遙の血涙も古えの薄命に泣いた詩人のそれと同じく、霜まよう土の下で人知れず固まり碧玉と化しつつあったことを夢想し得たであろうか。

かかる想像はともかく、子規の追悼句の中でとりわけ注目したいのが、第三句の《鶴鳴いて月の都を思ふかな》である。というのは、《月の都》と云えば、子規に同名の悲恋小説があり、それがこの句の上に影を落としているように思えてならないからだ。それに、《鶴鳴いて》の《鶴》も、逍遙の詩に多く用いられる語であった。例えば、『逍遙遺稿』外編の「偶感」其一に「寒燈夢を照らして影凄其たり、瘁盡す海南鳳鶴の姿」といい、同じく其二に「春風奏せんと欲す落梅の恨、奈にせん此の病軀鶴様に癭せたるを」とあるのは、病弱であつた逍遙が自らの瘦身を鶴に比擬した表現である。とすれば、子規のいう《鶴》とは中野逍遙その人を象徴的に形象化した姿と見る事が可能であろう。もともと鶴は古来中国においては《仙禽》と称せられ仙人の乗り物ともされたから、直ちに《鶴》は逍遙と考えなくてもよいかも知れぬが、私には《鶴》が逍遙その人であつたように思えるのである。ただ、別の解釈も成り立たぬわけではない。《月の都》に帰った人、逍遙を慕つて、鶴が鳴いていると見る見方である。その場合には、《鶴》は逍遙を慕う人、それも女性とみるのがよいと思われるが、子規がそのような女性の存在を知っていたかどうか。もとより南条貞子ではあり得ない。かく考えると、《鶴》は逍遙は《月の都》に憧れ、この世に嘹唳一声を残して天空高く翔び立つてゆくというのが、子規の句の大意であつたろう。

さて、小説「月の都」であるが、この小説は、幸田露伴の『風流仏』に感激した子規が明治二十四年末から二十五年二月にかけて執筆し、苦心惨憺やがて完成を見るや、勇躍、露伴のもとを訪れ閲読

を乞うたものの、はかばかしい評価が得られず、「拙著ハまづ。世に出る事。なかるべし」と小説を以て世に立つことを断念したといういわくつきの作品である。その後、明治二十七年になって子規が自ら編集の任にあたった「小日本」に二月十一日から三月一日まで、草稿に多少手を入れた上で十三回にわけて連載し、一応陽の目をみることになった。「小日本」に発表された「月の都」のあらましは、次の如くである。

「世になき美人の面影を忍ぶことこゝに何年」という「山の手辺に住居して今業平と正札つきの桂男」高木直人が、花見の宴にと叔母の家に招かれた際、来合わせた水口浪子に一目惚れする。浪子の父が紳商か法学博士でなくては嫁にやらぬと高言してあるのを知って悩み、思案のあまり痩せてゆく直人に叔母が気散じの旅を勧めたが、一月余りの旅行の間も想うは浪子のことばかり。そのうち彼女が「痘痕博士」と紳名される男と結婚するという噂に、すっかり気鬱ぎ、「今迄つまらぬと言ひし浮世も今は厭なり。好嫌ひのありし人間も今は盡く厭なり。あゝ我ながら過てり。理想の美人を人間に求めしこと第一の不覺、言ふも詮なし。他人が嫌なより我自ら人間が嫌なり」との感慨を洩らす。やがて直人の母が風邪から病の床につき、息子の行く末を案じて結婚話を持ち出すが、直人は黙したままである。水口の令嬢を娶らん気かと質され、直人は出家が素志だと答える。氣落ちした母はそのまま身罷り、直人も病いがちとなつて藥代も嵩み、遂に家や地所を売り払つて裏長屋に移ることとなつた。一方、直人のことを憎からず思つていた浪子は、その後慕る想いに鬱ぎこみ、見かねた乳母のすすめで、意を決して直人に手紙を認める。だが、返書には「いやです」の一言のみ。

居ても立つてもおられず直人の家を訪ねると、窓の戸に「月の都へ旅立ち候」と書き残されているばかりであつた。(上巻)

かたや「行脚の旅に身を賣して」家を出た直人は、無風と名乗る旅の僧から白風という法名をもらひ、草庵に住することとなつた。「迷ふ勿れ白風、執着は迷なり。悟れ白風」と諭されても、浪子の面影頭から離れず、その姿を幻に見る。出家行脚の途中、偶然浪子の乳母に出会つた直人は、意外な話を聞いて仰天した。浪子が大川に身投げしたというのだ。一命をとりとめたものの、もはや生きる望みも氣力も失なつた浪子は、直人宛の遺書を乳母に托していた。「月のみやことやらんにおはし候はんには十五夜の清光をたよりに月の一度のあふせなりともいかにかりうれしかるべくとはかなき事のみ力に此世の御暇こひ……」とあるのを読み、すっかり正氣を失なつて直人は何処ともなくさまよい歩く。狂乱した彼の眼には道の辺の石地藏や冬田の案山子さえ浪子に見え、「これ程叫んでもお返辞の無きは月の都へ上られたそうな」と呟く有様。流浪の果てに三保の松原に至つた直人は、一夜の暴風雨とともにその姿掻き消え、嵐の去つた翌朝残つたのは「白浪にゆらゆらと寄る破れ笠」一つ、そこには「月の都へ帰り候」という文字が幽かに読みとれたという。(下巻)

この「月の都」は、上下二巻各六章からなり、それぞれ『易』の爻辞(上巻は渙、下巻は中孚)を配し、「文語体美文調で、道行物、謡曲のスタイル、西鶴ふうの文体」などを織り交ぜた凝つた作品だが、従来その完成度において難があるとされ、文学史上の評価は極めて低かつた。今西幹一氏は、「陳腐な趣向の上に此岸の二人の現実性の付与を殆んど欠いている」と指摘し、『月の都』は評

判を呼ばなかったし、今後とも再評価に値せぬであろう。公表すること子規は執着し、愛着して来た『月の都』を葬ったのだと言えよう」と述べた上で、「講談社版全集十三巻に収載する小説十篇は、敢えて文学史上に残す必要のない出来栄である」と断じている。

『月の都』を近代小説史の流れの上においた場合、あるいはかかる見解が一般的であるかも知れないが、ここではその点にこだわらないうちにはない。ただ、子規が『多情多恨の人』中野逍遙の死を悼んだ時、このそれ自体薄幸な運命を負った小説の内容がまざまざと思い出され、ある種の感慨をもたらしただけではなかったかと勝手に思いを馳せてみたくなるのである。

先に述べたように、中野逍遙は南条貞子に激烈なまでの恋心を捧げたが終に報われることはなかった。貞子はその歌の弟子であったことから、友人の佐々木信綱にも仲介を頼んだが無駄であった。逍遙の恋が実らなかった理由について、笹淵友一氏は「その有力な原因は南条の家風にあつたらしい。貞子の父は実業家であり、明治の新時代に漢文学などを専攻しようとする人物はその女婿として適格ではなかった。それに逍遙が好男子ではあつたが病弱であつたことや、貞子その人が逍遙に対して積極性をもたなかったこともその原因であつたやうである」と推測されている。もとより、貞子の積極的でなかった点が最大の要因であろうけれども、貞子の父親も「月の都」において浪子の父が紳商か法学博士の婿をと考えていたのと全く同じであつたやうだ。そして実際に明治二十七年三月、二十四歳の貞子が結婚した相手というのが、岡山県出身の弁護士であつたのだ。小説では高木直人と水口浪子とが互いに相思の仲となりながら行き違い此岸での愛を貫くことができず、現実の中野逍遙は実りなき恋に生涯を賭けようとし、かつて残月子こと佐々木信綱に対し

て「語を寄す残月長く嗟くを休めよ、吾が輩も亦た是れ艶生涯」と悲しいばかりの覚悟の程を披瀝したこともあつた。^(注21) されば、明治二十七年十一月の逍遙の突然の死は、かなわぬ恋に行斃れた者の如くに子規には思えたはずだ。無風の「悟れ白風」の呼びかけもついぞむなしく、白風高木直人が『月の都』へと旅立っていったように、逍遙中野重太郎も他人から見れば、「狂とも痴とも」評さるべき迷妄煩惱の世界に呻吟し、煩悶憂懷を抱いたまま溘然とこの世を去ってしまったのである。子規は生前、自分のもとを訪れた逍遙に「悟れ」君と一喝を浴びせていたかも知れぬ。だからこそ、そのあまりにもあつけない死が腹立たしくやるせなく感じられたのであろう、それ故に急逝の直後に、

風がいやとは餘り無分別

と苛立ちを抑えきれず叫んだのであつたが、改めて考えれば、主人公高木直人が物狂いの果てに『月の都』に帰って彼岸で理想とした恋人と結ばれるという己が小説の顛末をほとんど地でいった男のようにも見えてきて、

鶴鳴いて月の都を思ふかな

と、自らの小説『月の都』を詠みこんだ一句を、逍遙に手向けたのではなかったかと思われる。

五

以上これまで、正岡子規と中野逍遙との関わりを逍遙の子規宛書簡や子規の逍遙追悼句を見ることによつて探ってきたが、最後に逍遙の他に今一人、『月の都』に帰った男、藤野古白（名は潔）を追悼した子規の新体詩について触れておきたい。子規は、明治二十八

年四月七日に拳銃自殺を図り十二日に亡くなった四歳年下の従弟を偲んで、自らがその文業を編んだ『古白遺稿』(明治三十年五月刊)に「古白の墓に詣づ」と題する各連四行、二十連にわたる長詩を添えた。その第十三連から十六連にかけて次のようにある。

ある夜の夢に 美しき
人に逢ひけん。 其人と
何かたらひし、 夢の跡、
うつゝやなごり 雲五色。

雲の上なる あて人を
塵の浮世に 求めしは
いたづらなりき。 月の夜半、
朧に見えし 花の顔。

此世に無しと 聞けば、など
此世慕はん。 あはれ彼
月に住むとし 聞かば、吾
月にかけらん、 羽はなけど。

心定めし 其刹那、
やさしき人の 情ありて
押しとゞめなば、世に斯くて
ながらへざらん。うたて、あな。

この箇所を掲げたのは、これを中野逍遙を悼んだ詩として読んで、も全く違和感がないどころか、逍遙その人を歌ったのではないかと錯覚させる程であるからだ。ここに詠じられている藤野古白も実は

逍遙と同様、実らぬ恋に悩んでいたという。そのことが、かかる錯覚を生じさせるのであろうか。古白の自殺の誘因の一つに失恋があったことは、子規が『古白遺稿』に附した「藤野潔の傳」のなかで、

熱情を外に發する能はざりしによる。熱情の最も著きは愛なり。(中略) 彼が曾て長文の一書を認めて未だ親まざるの愛人に贈りしが如きは世俗の少女に對して理想的の愛を得んとしたる者にして、其方便のつたなくやさしき處彼の愛の無邪氣なるを見るに足る。

と述べていることから窺われる。

〈雲の上なるあて人を塵の浮世に求め〉、〈世俗の少女に對して理想的の愛を得ん〉としたのは、古白も逍遙も同じであった。そこに彼らの悲劇が胚胎していたともいえる。ともにあまりにも〈無邪氣〉、つまりは純粹でありすぎたのだ。かかる古白について子規は〈やさしき人〉の情あらば、かくも早すぎる死を迎えることはなかっただろうと言うが、その場合に〈やさしき人〉とは、必ずしも古白が思慕した女性のみに限定されるのではなく、恐らくは子規自身をも含めての謂でもあったのだろう。そして、古白に對する子規のおもいには、表現こそ異なれ、中野逍遙を哭して西谷虎二が「冷淡水の如き社會は此の眞摯朴實なる詩人の涙に接して些の同情をも與ふるなし」と激越な調子で叫んだのと相通ずるところがあり、より強い自責の念が込められているように感ぜられる。西谷は「冷淡水の如き社會」が逍遙に一片の同情すらも与えなかったが故に、その長逝——病死というよりほとんど自死に近いもの——を招いたのだと痛憤慟哭し、それは「社會の罪乎將た彼の罪乎」と問うているのだが、けだし(社會)とは実体のつかぬ茫漠たるぬつぱらぼうとして現

前し存在するのではなく、大抵の場合〈やさしき人〉に微分され得るものなのだ。

更に子規の「古白の墓に詣づ」詩には、先の引用箇所が続いて、身を捨て後、汝がため

熱き涙の 一雫

誰こぼしなば、あぢきなく
捨てし身をこそ 喜ばめ。

とうたわれている。古白のことはともかくとして、この一聯を読むとき、中野逍遙の歿後に人知れず〈熱き涙の一雫〉をこぼした心優しい女性がいたことを想わずにはいられない。近年、原田憲雄氏の精力的な調査研究のおかげでようやくその素顔が明らかになった「春夢子」こと坪井すむがその人である。^(注24)すむは、恐らくはその生涯においてたった一度きりしか書かなかった小説『誰が罪』のなかで、中野重太郎との出会いと別れをしるし、彼の人に対して己れが〈やさしき人〉になれなかったことを悔いた。^(注25)かかる人のありしというだけで、〈月の都〉に旅立った中野逍遙も莞爾として微笑みを浮かべたのではあるまいか。

注

(1) 『慈涙餘滴』(宇和島市立図書館所蔵)は、宇和島市伊達事務所長の河野傳氏の御尽力により、川崎宏氏の「中野逍遙著『慈涙餘滴』縁起 併せ『逍遙遺稿』復刊のこと」と題する序文を附して中野逍遙百年忌にあたる昨年(一九九四年)十一月に刊行された。

(2) 以下、引用の書簡は、講談社版『子規全集』別巻一による。なお、『逍遙遺稿』刊行のいきさつについては、川崎宏「からうた集『逍遙遺稿』考」その成立と詩賦作品の餘響など」(関東学院女子短期大学「短大論叢」第八九集、一九九三年一月)及び「中野逍遙の戀と詩と田山花袋」『逍遙遺稿』の成立とその餘響など」(花袋研究

学会々誌」第十一号、一九九三年三月)に詳しい。

(3) 子規の「筆まか勢」第一編「生徒の尊称」(講談社版『子規全集』第十巻)。これは、第一高等中学二年三之組で級友たちが黒板に樂書した互いの人物評を子規が書き写しておいたもの。因みに他には、夏目「the Eyes」赤沼(金三郎)「the Sincere」米山「the Hermit」龍口(丁信)「the Anxious」正岡「the Cold」等とある。このうち赤沼金三郎(字は士朗)については『逍遙遺稿』外編に「短歌行、赤沼士朗に寄す」詩があり、龍口丁信は『逍遙遺稿』巻末に「逍遙中野君を哭す」という一文を寄せている。

なお、逍遙が平素寡黙であったことについては、張滋昉の「逍遙遺稿の序」に「人と為り沈黙寡言」とあるのを始めとして、高橋作衛の「逍遙遺稿の後に書す」に「逍遙は平素沈黙にして漫りに人と接言せず、資性も亦た狷介にして常人と相容れず」といい、龍口も「沈黙寡言」と評している。

(4) 明治二十八年の「正岡子規へ送りたる句稿」^{その三十}十月末の中に「弔古白」と題した「御死にたか今少ししたら蓮の花」の句の次に「弔逍遙」^{一句}として収める(岩波版『漱石全集』第二十三巻、一九七九年)。

(5) ちなみに、子規が〈多情〉(多恨)の語を用いた例として明治二十二年の「讀書癖」(講談社版『子規全集』第九巻)に、自らの喀血の原因を旺盛な読書慾のせいだとし、「多情の好男子 多恨の佳女子 相戀ひ相思ふの極 終に生命を以て感情の犠牲として刀劔に伏し毒藥を飲むと何ぞ異ならんや」というくだりがある。

(6) 『寒山落木』巻三、「終リノ冬」所収(講談社版『子規全集』第二巻)。
(7) 明治二十七年十一月十九日、「日本」の雑報欄に「市井のくさく」と題して

◎文藝士中野重太郎君逝く 帝國大學文科に漢文學科を置きし後同科を専修せし者は中野君を以て始めとす君は豫陽宇和島の人夙に東京大學豫備門に入り爾來螢雪の功を積み事十餘年本年七月を以て業を卒へ未だ平年ならずして早く其訃を聞く悲いかな君が性素と多情多恨其多情多恨の極は却て幽鬱沈黙と爲り幽鬱沈黙の極は發して多情多恨の詩賦と爲る近者君等東亞説林なる一雜誌を發行して以て萬文の氣焰を吐かんとす第一號に載せたる紀行及び詩も今は君の遺筆となり未だ第二號を見ずして彼土に逝く君が多情

多恨は終に此濁世穢土を厭ひたるか將た此濁世穢土は終に多情多恨の人を容る、能はざりしか之を君に問へば君答へず之を天地に問へば天地答へず聞ゆる者は只寒風林木を振ふの聲のみ呵と前途有為とはいえ、社会的にはほとんど無名に等しい一文士士の訃報を伝えているが、その内容措辞及び交友関係からみて、子規の筆になる一文であることは疑いない。(困)の一句は、この記事が書かれた前後に恐らくは詠まれたのであろう。

(8) これは、『逍遙遺稿』未収。

首(か)を挙げて濁世 栖むに勝へず / 只だ美人の玉よりも情ある有り / 君と相老ゆ何れの辺か好からん / 楊柳春風酒を売る家

と訓読するのであろうが、このままだと韻を踏まず詩の体を成さない。それに「情於玉」の三字、文意通じにくい。ただし、「玉」字は「花」の誤まりではなからうか。草書体では字形が似ている場合がある。「花」字であれば、下平麻韻で「家」と韻があうし、意味も通る。待考。なお、結句は、前漢の司馬相如と卓文君とが成都に駆け落ちし、酒場を開いて生計を立てたという故事を意識しているよう。この二人のことは、逍遙が好んでこれを詠じている。拙稿『逍遙遺稿』札記「才子佳人小説との関わりをめぐって」(「相山女学園大学研究論集」第十八号第二部、一九八七年)及び『逍遙遺稿』札記「秋怨十絶其七について」(同上第十九号第二部、一九八八年 参照。血を吐きし杜鵑 啼き残す 中天半夜の月 蹄を磨せし驢駒 蹴り尽す 浮世千秋の塵

(9) 「古白は天才の人である弱者である而して空想家である」(「四國文學」第一卷十二号、明治四十三年四月。講談社版『子規全集』第二十卷の解題に収録)。

(10) 「筆まかせ」第三編(講談社版『子規全集』第十卷)。「青厓子の白雲峰の詩に和し併せて子規雅兄の達覧に供す」(講談社版『子規全集』別卷三三。青厓子は、国分青厓のこと。なお「白雲峰之詩」の「之」字を『子規全集』では踊字「々」に作るが、誤まりであろう。ちなみに逍遙の詩は次の通り(『逍遙遺稿』未収)。

一身千萬心。々々又一身。々凝夢冷寂。身動神蕩紛。
理界日星霽。情林猿馬奔。道高俗人笑。山中猛獅馴。
一身 千万の心 / 万心 又た一身 / 身凝れば 夢冷寂

／ 身動けば 神蕩紛 / 理界 日星霽(は)れ / 情林猿馬奔 / 道高くして俗人をば笑はん / 山中 猛獅馴る

(13) 講談社版『子規全集』別卷一では、七月とするが、本文中に後述するように、逍遙の九州旅行は八月初旬に始まっている。「九州漫筆並びに序」(『逍遙遺稿』内編)にも「八月初旬、舟、鶴城(宇和島のこと)を発して豊後に着き」云々とある。それに詩稿には張滋昂の批点と評語が附されているところからして、九月帰京後子規に寄せたものと思われる。なお、「九州感慨十二律」其一の初句「炎風八月不消愁」の「八」を『子規全集』では「七」に作る。

(14) これら四句は、『寒山落木』巻四(講談社版『子規全集』第二卷)の春・夏・秋・冬の部にもそれぞれ「中野逍遙を憶ふ」(春)、「中野逍遙を悼む」(夏)、「中野逍遙を吊ふ」(秋)、同上(冬)と題して収録されている。

(15) このことは、既に宮澤康造「漢詩人中野逍遙一人と作品」(「独協大学教養諸学研究」第二十二卷、一九八七年)に指摘されている。明治二十五年三月一日付河東兼五郎・高浜清宛書簡(講談社版『子規全集』第十八卷)。

(16) 講談社版『子規全集』第十三卷所収。

(17) 久保田正文「正岡子規・その文学」(講談社、一九七九年)の「小説について」。

(18) 「子規の小説」『月の都』への執着、あるいは愛着(「短歌」一九八七年八月号)。

(19) 『文學界』とその時代 下 第十章「中野逍遙」(明治書院、一九六〇年)。

(20) 「狂痴痴詩」其六(『逍遙遺稿』外編)の一節。拙稿『逍遙遺稿』札記「狂痴痴詩其六について」(「相山女学園大学研究論集」第二十三号第二部、一九九二年 参照)。

(21) 講談社版『子規全集』第二十卷所収。

(22) 「中野逍遙を悼む」(『逍遙遺稿』雑録所収)の一節。

(23) 原田憲雄氏が「方向」(京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内方向社)に第一一一号(一九九〇年三月)から第一三九号(一九九一年七月)にかけて発表された春夢子坪井すむ関係の論考は次の如くである。

○中野逍遙「遺稿」中の「春夢子」など(第一一一号―一二二号)

○春夢女史の文と南子の歌(一)～(四) (第一一九号～二二二号)

○春夢女史小記 (第二二三号)

○春夢様御もとー中野逍遙の手紙(一) (第二二四号)

○世に一人のこひしき君ー中野逍遙の手紙(二) (第二二五号)

○春夢女史の『誰が罪』(一)～(六) (第二二六号～二三二号)

○玄益・玄得・玄道・峰首庵ー春夢女史周辺一 (第二二三号)

○桜井女学校ー春夢女史周辺二 (第二三三号)

○女子剣舞ー春夢女史周辺三 (第二三四号)

○中野逍遙の手紙(三)ー春夢女史周辺四 (同右)

○中野逍遙の手紙(四)ー春夢女史周辺五 (第二三五号)

○中野逍遙の手紙(五)ー春夢女史周辺六 (同右)

○中野逍遙の手紙(六)ー春夢女史周辺七 (第二三六号)

○中野逍遙の手紙(七)ー春夢女史周辺八 (第二三七号)

○銀閣寺の萩ー春夢女史周辺九 (第二三八号)

○教員・主婦としてのすむ女史ー春夢女史周辺一〇 (第二三九号)

この他、原田氏は新宮市在住の若林芳樹氏の編集発行にかかる文芸同人誌『燐祭』の第38号(一九九〇夏)に「春夢女史」を、第39号(一九九〇秋)に「徐福の墓ー雑誌『青我』に見える春夢女史の作品」を、第42号(一九九二春)に「坪井家の人々」をそれぞれ載せておられる。

(25) ちなみに、原田憲雄氏は、「春夢女史の『誰が罪』(一)」の中で、子規や佐々木信綱・西谷虎二の追悼文を挙げ、「これらは逍遙を悼む心情から出た激語で、他の特定の人を責める意はおそらくなかっただろうが、逍遙の愛にこたえなかったと自覚する女性が読めば、おのれが責められる感じがしたのであろう。あるいは人の激語を聞く前に、もしわたしがこたえていたら逍遙は死ななかったのではないか、といった反省をもったかもしれぬ。／＼『誰が罪』は、春夢女史のそのようなやさしい反省が自らを虐めるところ、すなわち逍遙の死後数年の間に書かれたものらしい」と述べておられる。

〔訂正〕

前稿『逍遙遺稿』札記「狂痴詩其六について」(「椋山女学園大学研究論集」第二十三号第二部、一九九二年)には、次のような誤字脱字の箇所があったので、ここに訂正させていただきたいと思う。

(誤) (正)

九四頁下段五行目

九六頁下段二六行目

九八頁上段三行目

九九頁上段十九行目

九九頁下段一行目

一〇〇頁上段七行目

一〇二頁上段十一行目

一〇二頁上段十六行目

あき秋↓あき風

不可思議↓不可思議

喜々として↓嚙々として

蜂青庵と作る↓蜂青庵(岩波文庫本では蜂

すなわら↓すなわち

みづからの傳に書けどさびしきわが世は↓

みづからの傳には書けどさびしわが世は

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌

春夢女史と南子の歌↓春夢女史の文と南子の歌